

神楽研究コラム

シリーズ「源頼光」



## 【目次】シリーズ源頼光



はじめに	3p
第一章 頼光の実像	4p
第二章 四天王	7p
第三章 鬼同丸退治	10p
第四章 葛城山	14p
第五章 戻り橋	18p
第六章 羅生門	22p
第七章 大江山 前編	26p
第八章 大江山 中編	29p
第九章 大江山 後編	34p
第十章 英雄化された頼光	39p
参考文献	42p
写真協力	
イラスト	
著者	

## はじめに 神楽研究コラム シリーズ「源頼光」

神楽研究コラムは、2006年8月に開設した、神楽ポータルサイト「神楽の杜」の情報発信ツールとして併設した「神楽のぶろぐ」の特集記事として掲載したものです。

## 第一章 頼光の実像

芸北神楽の登場人物の中で、もっとも英雄的なキャラクター、源頼光。大江山三段返しをはじめ、葛城山(土蜘蛛)、山姥、鬼同丸退治などその活躍ぶりは他に類を見ない。しかし、神楽や伝説の中でこれほど活躍しているにもかかわらず、歴史の授業などで彼の名を耳にした記憶はない。いや、別に授業をサボったり、居眠りをしていたわけではない。とにかく、伝説上の英雄である源頼光、その実像に迫ってみることにする。

源頼光は、清和天皇のひ孫にあたる源満仲の長男として、940～950年あたりに生まれた。頼光の実像は、当時のことがいろいろ記された日記で知ることができる。と言っても、頼光自身が書いた日記は残っておらず、参考になるのは藤原道長が書いた「御堂関白記」、藤原実資の日記「小右記」などである。藤原道長とえば、「この世をば 我が世とぞ思う望月の 欠けたる事も無しと思えば」の歌で有名なあの道長である。



東山神楽団「天神記」に登場する藤原時平が、この歌をなぞったセリフを言う場面があるが、すぐにピンとくる神楽ファンの方もおられるだろう。頼光はこの藤原道長に仕えていた人物の一人だった。正確には、一方的に品物を贈りつけて気に入られようとしていたようだが。



そのあたり、これらの日記を読むと、頼光が道長にたびたび貢物をしていたことが記されている。ちなみに、この日記には、「〇〇年〇月に頼光が大江山へ登った」とか、「土蜘蛛を退治した」などのことは一切記されていない。念のため。

また、道長の家が火事で焼けた時には、いち早く物資、家具一式などを贈り、大変喜ばれたそう。その後、新しくなった道長の家にも、さらに頼光から続々と贈り物が届いていたようで、その品物を見ようと見物人が集まるほどだったらしい。

このことから察するに、頼光は相当なお金持ちだったようだ。確かに神楽に登場する頼光さんは、とても豪華絢爛な衣装を着ているし！ってそれは関係ありませんね。



記録上、頼光は様々な要職についていた。朝廷から任命され、それぞれの国を治める**国司**（今で言えば県知事か？）や、**重要人物の警護**など、かなりエリート組の仕事ばかりである。特に国司にいたっては、備前(岡山)から始まり、伊豆、信濃、美濃、尾張、但馬、讃岐、丹波、河内、伊予、紀伊、摂津(大阪府)などなど、16～17を数える。中でも有名なのはセリフでおなじみの「**摂津守**」だろう。しかし実は、摂津守に任命されてから一年とたたず、頼光は亡くなっている。1021年のことだ。

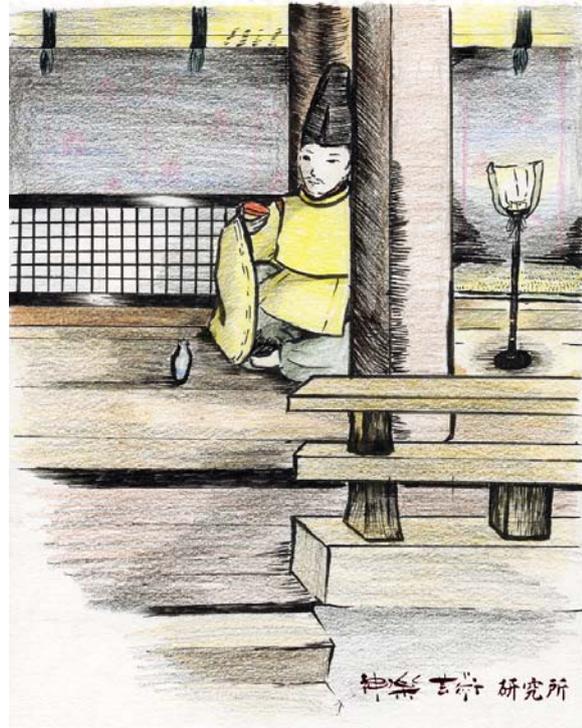
こういった仕事をしっかりとこなし、着実に財産を蓄え、その財力を持って当時の最高権力者に貢いでいた。こうしてみるとかなり**出世上手な人物**だったことがわかる。さらに当時の出世術の最たるものは、**自分の娘を天皇の嫁**にすることだった。道長もそうやって摂政となり、栄華を築いていった。頼光はこの道長の兄である**道綱**を娘婿に迎えている。よって摂関家の道綱は頼光の家に住むことになり、それによって頼光は自分の地位を高めようとしたようだ。

以上が記録からわかる頼光の実像である。ちなみに「**鬼同丸退治**」などに登場する、弟の**頼信**は、実際には頼光とは腹違いの弟になり、頼信も藤原氏一族の実資に仕えていた。そしてなんと、頼信の子孫からは、「1192 つくろう鎌倉幕府」の**源頼朝**が出ている。頼光の子孫からは頼朝のような大物は出ていないが、後世まで「頼光」の名を残すことができたのはやはり、当時の最高権力者だった藤原道長に気に入られていたからだろう。しいて言えば、「源頼政ぬえ退治」などの**頼政**が、頼光の子孫での大物と言えるか。



このように、神楽の物語からはとても想像できない、鬼退治とはまったく無縁の平和な毎日を過ごしていた平安の貴族というのが、源頼光の実像である。と、ここまで書くと当然、ではなぜ鬼退治などの伝説の英雄に仕立て上げられたのか、という疑問がわく。それはこのシリーズのラストにおいてまとめたいと思う。

というようなわけで、ついに始まった神楽研究コラム、シリーズ「源頼光」。神楽だけでは知ることのできない様々な物語などを、神楽ファンの方にわかりやすく伝えていこうと思うなり。「え～、そんなこともあったん？」とか「実はこうだったんかあ！」など、トリ〇ア的に言えば90へえ以上間違いなしのネタを、どんどん掲載していく予定。どうぞよろしく！



## 第二章 四天王

次は、頼光を語る上で欠かせない**四天王**について迫ってみたい。神楽マニアの方なら、その4人の名前がすべて挙げられると思うがいかがだろうか。その4人とは、**渡辺綱**(わたなべのつな)、**坂田金時**(さかたのきんとき)、**卜部季武**(うらべのすえたけ)、**碓井貞光**(うすいのさだみつ)。この4人、それぞれ個性的なストーリーを持っており、簡単に紹介すると、

渡辺綱…羅生門、戻り橋で鬼の片腕を切りとる。

坂田金時…上路山(あげろやま)で山姥の子として育つ。

卜部季武…滝夜叉姫に盗まれた宝刀、蜘蛛切丸(くもきりまる)を取り戻す。

碓井貞光…力持ちで知られ、源氏には力試しの岩が残っている。

これらのキャラを家来として束ねているのだから、頼光のリーダーぶりがよくうかがえる。戦隊モノで言えば、**チームリーダーのレッド**といったところか。ならば、綱はブルー、季武がグリーン、金時がイエロー(金のイメージで)、貞光がピンク(なんとなく薄い…)か。

5人合わせて「**一条戦隊、オニレンジャー!**」  
**ズジャー!!**

…なにがズジャーだ。取り乱しました、すみません。

気を取り直して、この4人についてももう少し詳しく調べてみる。



芸北神楽「**山姥**」で紹介される金時の物語は、「院の北面の武士である坂田時行(さかたときゆき)の妻、八重桐(やえぎり)が、夫を亡くして上路山にこもって山賊となり、その息子を**怪童丸**(かいどうまる)と名づけた。旅の途中だった源頼光にその腕を認められた怪童丸は、坂田金時と改められ四天王の一員に加わる」というもの。この「山姥」という伝説は、実は日本各地に存在する。神奈川県足柄山(あしがらやま)に住んでいた豪族の娘に八重桐姫というものがあり、その子供が金太郎と呼ばれていた、とか、山中にこもっていた老婆が、夢の中で赤龍と交わって生まれたのが怪童丸である、などさまざまである。しかし、上記で紹介した、金時の誕生から幼少についての神楽の物語は、江戸時代の浄瑠璃において初めて語られており、謡曲「**山姥**」はまた別の物語となっている。

渡辺綱については、後ほど「戻り橋」「羅生門」の章で詳しく述べることにする。

卜部季武についてだが、先に紹介した「滝夜叉姫に盗まれた宝刀、蜘蛛切丸を取り戻す」の物語を初めて聞いたという方もおられるかもしれない。伝説などで語られているストーリーを紹介すると、「季武が管理していた蜘蛛切丸が、滝夜叉姫の妖術によって盗まれてしまう。これが頼光の怒りに触れたため、季武は碓井貞光とともに滝夜叉姫一味と戦い、これを成敗し刀を取り戻す」というもの。安佐町の宮乃木神楽団などがこれを神楽化した演目を舞っておられる。



碓井貞光については、力持ちという点と、季武とともに刀を取り戻したという話以外にはこれと違ってない。そのせいか、やはり芸北神楽においても最も登場回数の少ない、名前のおり「うすい」四天王になってしまっている。

そして、この四天王が登場する面白い話が「今昔物語」に収められているので紹介する。

坂田金時、卜部季武、碓井貞光の3人が、賀茂祭(という大きな祭)の名物である行列を見に行こうという話になった。しかし、「馬に乗って見に行くのもなんだし、歩いて行って顔を隠すわけにもいかんし、でも見に行きたいし、どがあしょ〜かいの〜(広島弁バージョン)。」と困っていた。(注：当時、この祭を見に行くのは貴族がすることで、彼らのような武士が見に行くような習慣はなかった)すると、その中の一人が(誰とは書いてない…季武にしとこう)「ほいじゃったら、牛車を借りてそれに乗って見よ〜や！」と提案した。するとまた一人が(…金時でいいか)「乗ったこともない牛車に乗って、位の高い人にバレたら、引きづり下ろされて蹴られて死んでしまうわぁ！」と言った(そんなにヤワなんかい!)。もう一人が言うに(これが貞光だね)「すだれを垂らして中を見えんようにして、女性が乗るような車に変装して見に行くのはどがなや？」すると2人が「そりゃあえ〜わ〜！」と賛成し、さっそく牛車を借りて出発した。

ところが、3人とも牛車に乗ったことがないので、牛車の中はまるで物の入った箱を揺らすような状態になってしまった。3人は中で振り回され、頭をぶつけ、頬をぶつけ合い、ゴロゴロ転がったりして、あっちゃなんことになってしまった。こうやって行くうちに、3人とも車酔いして(当たり前や!), 持ち物や烏帽子まで落としてしまった。牛車の速度が速かったため、中から「もっとゆっくり!」と叫ぶと、そのまわりにいた人々が、「こりゃ〜女の人が乗る車じゃが、どがあな人が乗ってるんじやろうか。」「なんか大きな鳥が鳴きよるような声じゃが、聞いたことないの〜」「田舎の娘らが乗っとんじやないんか?」「いや、声は男みたいだぞ!」などと怪しんでいた。



そしてようやく祭の会場に着いたはいいが、来るのが早過ぎたようだった。3人とも車酔いでフラフラで、目が回って物が逆さまに見えるほどだった。あまりに酔ってしまったのと、早く着いたために、3人ともぐっすり寝てしまった。ところがその間に、名物である行列が通り過ぎてしまったが、3人とも死んだように寝ていたのでまったく気づかなかった。そして祭も終わり、人々が片づけを始めると、その音の騒がしさでようやく3人が目を覚まし、そして驚いた!「ありゃ!? もう終わっとるじゃん!? せつかくここまで車酔いしながら来たのに〜!! むかつく〜!!」「帰るのにまた牛車に乗れば、わしらはもう生きちゃおれんわ…」「んじや〜もうちいとここで待って、誰もおらんようになってから、歩いて帰ろうや。」ということになった。まわりに誰もいなくなると、3人は牛車から降り、車を先に帰らせ、靴を履いて扇で顔を隠し、頼光殿の家に帰った。

という物語。数々の妖怪、鬼を退治してきた武士たちだが、こんな情けない一面もあるという興味深い物語だと思う。ちなみに、この話には渡辺綱は出てこない。綱は四天王の中でも一つ格上の存在だったようで、このときも頼光のお供でもしていたのかもしれない。

次回はいよいよ、怪物退治の話を見ていきたいと思う。

### 第三章 鬼同丸退治

今回のテーマは「鬼同丸退治」。この演目は北広島町、八重西神楽団のオリジナル神楽である。そこで今回は、八重西神楽団の大久保団長をはじめ団員の方に取材させていただいたので、それをまとめたものを踏まえながらコラムを進めていきたい。

まず、「鬼同丸退治」のあらすじを簡単に紹介する。

都の夜回りを終えた源頼光と渡辺綱が、あまりの寒さのため途中で頼光の弟、頼信の屋敷に立ち寄る。そこで酒宴となり、ふと頼光が馬屋を見ると、京を荒らす盗賊、鬼同丸が縄で縛られていた。頼光は頼信にさらに強く縛るように命じる。しばらくして一行が寝静まると、鬼同丸は縄をほどいて頼光に襲いかかるが、頼光の知恵と武勇によってあえなく退治される。



この物語でまず興味を惹かれるのは、頼光の弟である、頼信(よりのぶ)の存在。歴史上においては、頼光より活躍していたと言っても過言ではないにも関わらず、伝説の中では完全に兄に主役の座を譲ってしまっている。そういった意味でも、頼信が登場するこの演目は非常に興味深いと言える。ではこの演目を創作することになった経緯についてお話を伺ってみよう。

「まずはじめに、頼光の若いころの物語をやりたかったんです。頼光と言えば、大江山や土蜘蛛などがありますが、それ以前の話を神楽にしたいと思いました。そこでいろいろ調べた結果、この鬼同丸の物語を見つけました。その話があまりにも面白く、神楽化されていないのが不思議なほどだったので、これにしようということになりました。」

それでは、出典となった古今著文聞集(ここんちよもんじゅう)より「源頼光、鬼同丸を誅する事」を紹介する。

ある寒い夜のこと、某所に出かけた**頼光**が帰宅途中に弟の**頼信**の家近くを通りかかった。そこで**坂田金時**を遣わし、「今帰りようるとこなんじゃが、ぶち寒いけえ、ちいと寄らせてもろうて、酒ないともらえんじゃろか？」と言うと、ちょうど酒を呑んでいた**頼信**は奇遇だと思い、「ええ具合に酒宴をしょうるんよ。よう来ちゃんさった。どうぞ上がりんさいや。」と頼光一行を招き入れた。



そして酒宴も進んだころ、頼光がふと厩(うまや)の方を見ると、何者かが縛られてつながれていた。そこで頼信に「あっこで縛られとるんは誰きやあの？」と聞くと、「ありやあ**鬼同丸**ゆうぶんよ。」と答えた。頼光は驚いて、「鬼同丸をあがめに**やおう**縛っといちゃあいけまあ。もちつきつう縛らんにや。」と言うと頼信は「まっことあがあじゃの。」と言って部下に、もったきつ**縛る**ように命じた。そして鎖を取り出して逃げられないように縛り上げた。**鬼同丸**は、頼光の言ったことを聞いて「むかつくのお～。どがあぞして今晚のうちに恨みを晴らさにやいけん。」と思っていた。

酒宴も終わり、頼光、頼信ら皆が寝静まると、鬼同丸は**自慢**の怪力で、縄や鎖をひきちぎって逃げだした。そしてこっそりと窓から侵入し、頼光の寝ている**部屋の天井**にあがった。「こっから飛び込んでやっちゃりやあ、いかに頼光じゃいうてもわしが勝とうて。」などとあれこれ考えていると、わずかな**気配**を察知して頼光が目を覚ました。上



からかかってこられてはさすがに分が悪いと見た頼光は、「天井のほうに、いたちよりも大きゅうて、テンよりもこまいもんがおるみたいじゃの。」と言って、「誰かおるかあ？」と呼びかけると**渡辺綱**がすぐに参上した。頼光が「明日は鞍馬寺へ行くで。まだ暗いんじゃが、今から出かけるけえの。あんたらあもついてきんさい。」と言うと、綱は「みんなおりますけえ！」と答えた。するとこれを聞いた鬼同丸は「やばあ、いま飛びかかっても勝てんのう。酔って寝とるところをやっちゃろう思うたのに、今ヘタに手え出してもいけんけえ、明日の鞍馬へ行く道にしちゃろ。」と思い、天井から出て鞍馬山のほうへ行き、市原野(いちはらの)付近で**待ち伏せ**しようとしたが、身を隠すのにちょうどよい場所がなかった。そのため、近くで放牧されているたくさんの牛の中で、一番大きな牛を殺し、道端まで引っ張ってきて、その牛の腹をかきやぶってその中に入り、**目だけ**を出して**待ち伏せ**ることにした。



しばらくすると予想通り、頼光が四天王を引き連れてやってきた。頼光は馬をとめて、「こかあええ景色じゃのう。牛もえっとおるし、みんなで牛追いしようやあ〜！」と言うと、四天王たちは「おっしや〜！」と駆け出して矢を射ち始めた。みんな楽しそうにしていたが、突然、綱がなぜか**特に鋭い矢**を取り出し、そばで死んでいた牛に向かって狙いをつけ始めた。

みな「綱はなんしょうるんかいな…」と見ていると、綱は牛の腹を目がけて矢を放った。すると死んでいたはずの牛がユサユサと動き始め、腹の中から何者か大太刀を持って頼光に飛びかかってきた。見ればなんと**鬼同丸**で、綱の矢が命中しているにもかかわらず、ひるむことなく頼光に向かっていった。しかし頼光は少しも慌てず騒がず、太刀を抜いて**鬼同丸の首をアッサリ切り落としてしまった**。鬼同丸はすぐに倒れず、刀を頼光の馬の鞍に突き立て、首は馬具に食いついた。首を落とされてもなお、**勢い激しく戦うその様を語り伝える物語**である。さて頼光は、そこから**鞍馬へ行かずに**帰宅した。

確かに、頼光そして**四天王の武勇**がしっかりと描かれており、神楽にはもってこいの物語と思える。自分の危機を察知し、危険を回避してさらに相手をおびき出す策略を一瞬のうちに考え出した**頼光の知恵**。そしておそらく頼光の策略を感じ取った綱。鬼同丸も自慢の怪力をしかと見せ付けたが、さすがに**相手が悪かった**ようだ。まだ「鬼同丸退治」を見たことのない方は、「う、牛の腹から…！？神楽ではどうやってるんだ??」と思われるかもしれないが、当然、神楽の中に牛は登場しない。そんなふうに、**神楽化する際にあたっての苦労話**を伺ってみた。



大久保団長「**すべてがご苦労です(笑)**。これ！と決まったものがないわけですから、やるたびに進化しているんです。**毎回試行錯誤**の連続ですよ。」



そして実際に台本を担当された団員さんは、「もちろん、神楽の中に牛を出すのは無理なんです、その辺はうまく**神楽風に脚色**したつもりです。また、鬼同丸が天井に上がる場面がありますが、当初は、**天蓋に上がる**ことを考えていたのですが、ちょっと難しいので、いろいろ考えた結果、**幕を使って**うまく表現できないだろうかということになりました。」

なるほど…。さすがにいろいろとご苦労されているようである。では最後に、この演目の魅力について語っていただいた。

「見終わって、もう一回見たいと、見る人に思ってもらえればという気持ちですね。三回くらい見て、やっとなるほどという感じで。スピード感や派手さをメインにした神楽ではないんです。あくまでも神楽ですから、**芝居や劇になってはいけない**。ストーリーではなく、**頼光の八幡崇拝**を重点に、この演目をやっていきたいと思います。」

ほかの演目でもそうだが、見ていて「ここが前と変わっている」と気づくことは、神楽ファンのみなさんにはよくあることだろう。だが気づいてそこで終わりではなく、なぜ変更されたのか、それによって神楽全体がどう変わったのかというところまで考えれば、より深くその演目が楽しめるのではないだろうか。創作神楽となればなおさらである。ということで、少し変わった趣向でお送りした第三章、これにてお開き。次は本物の？怪物が登場する。

## 第四章 葛城山

さっそく芸北神楽における、一般的な「葛城山」のストーリーを紹介する。

病にかかった源頼光は、侍女の胡蝶（こちょう）に典薬守（てんやくのかみ）から薬を持ち帰るように命じる。しかし胡蝶は館へ帰る途中、土蜘蛛の精魂に襲われ命を落とす。胡蝶に成り代わった土蜘蛛の精魂は、薬を毒薬に変えて頼光に差し出す。毒薬で苦しむ頼光に土蜘蛛が襲い掛かるが、頼光は名刀「膝丸（ひざまる）」で切りつける。傷を負った土蜘蛛は、住処の葛城山へと逃げ帰り、頼光は「膝丸」を「蜘蛛切丸（くもきりまる）」と改め四天王に与え、土蜘蛛征伐を命じる。四天王は残された血痕をたどり住処を突き止め、土蜘蛛を成敗する。



新舞の中でも、見せ場が多く人気演目の一つである。これを「土蜘蛛」というタイトルで舞っておられるところもあるが、これは神楽の出典が謡曲「土蜘蛛」となっているためと思われる。しかし、新舞の元の台本では「葛城山」となっているので、当コラムではこれで統一していきたい。

では次に、神楽の元になったストーリーを、謡曲ではなく「平家物語 剣の巻」から紹介する。

源頼光が**病にかかり**、頭痛はするし高熱は出るし、意識はもうろうとするような状態が30日間も続いた。

ある時、少し容体が落ち着いたので、看病していた四天王たちは別の部屋で休んでいた。夜が更けた頃、灯りのついた燭台(しょくだい)の影から、七尺(約210cm)ほどの**法師**が現れ、するすると寝ている頼光に歩み寄り、**縄で縛ろう**とした。頼光は驚いてがばっと起き上がり「このわしを縄でひっくろうたあ、どこの誰ならあ〜！わりいやっちゃのう！」と言って枕元にあった**膝丸**をつかみ、「おんどりゃあ〜！」と切りつけた。四天王たちがこれを聞きつけてどやどやと走り寄り、「どがんしんさった!？」と言えば、頼光はかくかくしかじかと説明し、見れば**血の痕が点々と**残されていた。



四天王がそれぞれ火を持ってこれを追って行くと、**北野天満宮の裏手**に大きな塚があった。早速、塚に入って奥へ掘り進んで見ると、四尺(約120cm)ほどの**山蜘蛛**が現れた。四天王がこれを捕らえて頼光の元へ帰ると、頼光は「こんぐらいの事だったんか！こげなやつので30何日も寝込んどったじゃことの、いなげなことよ。そこらへんにさらしとけ!」と言ったので、山蜘蛛を**鉄の串に刺して**河原に立ててさらした。この時から膝丸は蜘蛛切丸となった。



いかがだろうか。おなじみの神楽のストーリーとは**違う点**がいくつかあることに気づかれたと思う。もっとも大きな違いは、「**胡蝶**」の**存在**だろう。芸北神楽「葛城山」において胡蝶はなくてはならない、いや、**主役**と言っても過言ではないほどのキャラクターである。しかしこの物語にはその胡蝶が出てこない。胡蝶の出ない「葛城山」なんて、**ルウの入ってないカレー**みたいなもんじゃないか。…ぐえ、まずそう…。

まずいカレーの話は置いて、謡曲「土蜘蛛」を調べてみると、こちらには胡蝶が出てくる。しかし、あくまでも侍女であって土蜘蛛の精魂のように扱われてはいない。仮にそうだとすると、セリフや展開などから胡蝶が土蜘蛛の精魂であるといったことは見当たらない。つまり、土蜘蛛の精魂としての「胡蝶」というキャラクターは、芸北神楽のみのオリジナルと言ってもいいと思われる。

次に、土蜘蛛の住処が葛城山ではなく、北野天満宮という点。北野天満宮と言えば、菅原道真が奉られている場所である。平安京からすぐの北の位置だから、奈良県にある葛城山とはかけ離れた場所ということになる。そりゃあ、血が点々と残るほどの傷を負わされて、100km くらい離れた住処に帰ろうとすりゃ、途中で失血死するわな。ではなぜこのような違いが生まれたのか。それを解き明かす確固たる証拠は残念ながら無いのだが、ひとつ仮説を紹介したい。



そもそも、「土蜘蛛」というものは何なのか。神楽で言えば「蜘蛛型の妖怪」であるのはみなさまご存知のとおりだが、もともとの意味はそうではない。実は、古く大和朝廷の時代から、反政府勢力は「鬼」に見立てられていた。そういった勢力は中心部から追い出されたわけだから、当然、山にこもることになる。その人々は「熊襲」とか「土蜘蛛」などと軽蔑の意味を込めてそう呼ばれ、忌み嫌われていたのだ。



ではそれを踏まえて、「土蜘蛛」のベースになった事件を考えてみる。

ある晩、都の位の高い人物の屋敷に盗人が侵入するが、見張りに切りつけられて逃げ去る。追っ手が残された血痕をたどると、北野天満宮の裏手で動けなくなった犯人を見つける。犯人は**すぐに処刑**され、調べると**葛城山周辺**の者とわかる。朝廷は、この事が明るみに出ては、都の警備体制の不備が露呈され、いたるところから**盗人が来る**かもしれないと恐れた。そしてこの事件をごまかすため「**武名高き源頼光の活躍と剣の威徳で、妖怪を退治した**」という話をでっちあげた。

というのが私の仮説である。もちろん、このような事件が本当にあったかどうかは知るよしもないのだが。やや説明不足な点もあるかと思うが、そう見当違いなものでもないはず。そしてこの仮説は、このシリーズのまとめにおいても**重要な伏線**となるので覚えておいていただきたい。



それにしても頼光の**超人的な能力**はハンパではない。頭痛、高熱で何日も苦しんだ上、胡蝶に毒薬を飲まされるのだ。それでも死なず、逆に襲ってきた土蜘蛛に傷を負わせている。頼光にとって**一番の薬は「妖怪」**の存在だったのかもしれない。始めは「ここまでやっても頼光に勝てないなんて、土蜘蛛はなんて弱いヤツだ!」と思っていたが、調べてみるとそうではなく、相手が悪すぎたようだ。これを読んだ**妖怪・鬼の皆さん**、何があっても頼光さん相手に**油断**しないように!

## 第五章 戻り橋

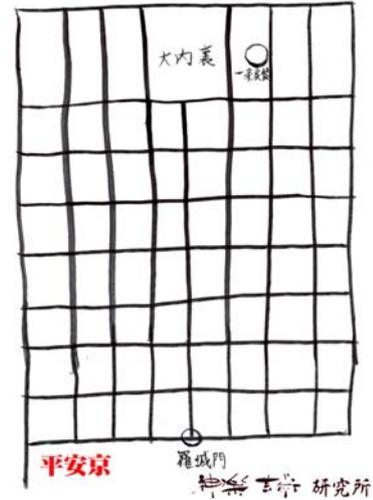
「都は羅生門、戻り橋あたりにおいて・・・。」

神楽ファンにはなじみの深いセリフだと思うが、戻り橋と羅生門の**実際の位置関係**をご存知の方はどれくらいいらっしゃるだろうか？簡単に図で示したのでご覧いただきたい。

実はこの二つ、軽く**5キロ**は離れていた。つまり**全然違う場所**にあったのである。「すぐ近くにあるものだと思ってた・・・」という方も少なくないだろう。が、ここで一つ疑問が生じる。

「ではなぜ、さも近くにあるかのように**続けて語られるのか？**」

近くにあると思っていた方には自然と湧き上がる思いだろう。なぜか？それは戻り橋、羅生門**それぞれ**に鬼が出たからである。つまり、セリフの「羅生門、戻り橋」の間には「AND」の意味が込められている、というわけだ。



というわけで、その「戻り橋」と「羅生門」にまつわる鬼の話を紹介しよう。まずは「平家物語 剣の巻」より、**一条戻り橋**に出た鬼の話である。

摂津守**頼光**のもとには、綱・公時・貞道・末武という四天王が仕えていた。中でも綱は抜きん出ていた。武蔵国の美田(みた)というところで生まれたので、美田源氏と言っていた。頼光が一条大宮に用事があったので、綱を使者に遣わした。夜も更けていたので**鬚切**(ひげきり)という刀を持たせ、馬に乗せて遣わした。目的地に到着して会合して帰り、**一条堀川の戻り橋**を渡った時、橋の東側に二十歳くらいの**女**で、肌は雪のように白く、紅梅の着物を身に付け、経を持ち、従者も連れず、たった一人で南へ向う者がいた。



綱は橋の西側から「ありゃあ、どけえ行きんさるんかのう。わしやあ五条の辺に行くんじやが、もう暗うなっていびせえじゃろうが。送っちゃろう。」と馴れ馴れしく言うと急いで馬から飛び降り、「この馬に乗りんさい。」と言って、女を抱き上げて馬に乗らせて堀川の東側を南の方へ行っていたが、この女が後ろを向いて「ほんまは五条の辺にやあ大して用事やあないんよ。あたしん家やあ都の外にあるんよ。そこまで送ってつかあさいや。」と言った。綱が「おおええで。どけえでも送っちゃるで〜。」と言うのを聞いた途端、**恐ろしい鬼**に姿を変え、「わしが行く所は**愛宕山**(あたごやま)でえ〜！」と言いながら、綱の髪の毛を掴んで**北西の方角**へ飛び立った。綱は少しも騒がず例の鬚切をさっと抜き、**鬼の手**をふつと切った。綱は北野天満宮の社の廊下の屋根の上にとろとろ落ちた。鬼は手を切られながらも愛宕へと飛び去った。



さて綱は髪の毛に付いた鬼の手を取って見てみれば、女の雪のような顔に引き換え、真っ黒であった。白い毛が隙間なく生えてまるで銀の針を立てているようだった。これを持って帰ると、頼光はびっくり仰天して、「晴明を呼びよせ！」と播磨守**安倍晴明**を呼んで「どがんしょーかー？」と問えば、「綱は七日休みをもろうて引っ込んどきんさい。鬼の手をようよう仕舞うときんさいよ。祈祷にやあ仁王経を読みなさい。」と言ったので、その通りにした。



六日が過ぎた黄昏時に、綱の宿所の門が叩かれた。「何にやあ？」と尋ねれば、「綱の乳母で、渡辺におったのがきたんでえ〜。」と答えた。綱は「わざわざ来てもらうたんじゃけども、七日の物忌みをしよって、今日は六日目なんじゃ。明日まではどがあやっても会えんけえ、宿を取りんさい。あさってになったら入れてあぎょうよ。」と言ったら、乳母はこれを聞いてさめざめと泣いて「そりゃあどうしようもないことじゃ。へじゃけども、あんたが生まれた時からやしのうて育てた気持ちを何じゃあ思うとんなら。夜もよう寝られんかった。濡れたところにわしが寝て、乾いたところにあんたを寝かせて、4～5歳になるまでは強い風にも当てんようにして、いつか大きゅうなって立派になったのを見たい思うて、昼夜ず〜っと願いよったかいがあって、頼光さんとこん中じゃ、あんたに並ぶもんはおらん。嬉しゅうて会いたい思よったけども、このごろ悪い夢ばかり見て心配になってここまで来たのに、門の内へも入れてくれん。親と思うてもらえん。情けないことよ。」



そこで綱はしぶしぶ門を開いて中へ入れた。乳母は「七日の物忌みって、なんかあったんかいの？」と聞くので、綱は隠すことではないのでありのままに話した。乳母はこれを聞いて「鬼の手ってどんなんかいの？見たいのう。」と言った。綱は「みやすいことじゃけども、七日目をすぎにやあだめよ。明日、日が暮れたら見せちやるけえ。」と答えた。「はあはあ、ほんなら見んでもええわ。わしや帰る。」と恨めしそうに言われた綱は、封じてあった鬼の手を取り出して乳母の前に置いた。乳母は「あらいびせ。鬼の手ってこぎやあなもんなんか。」と言うと、立ち上がって「こりゃあわしの手じゃけえ取るど！」と言いながら恐ろしい



鬼に変わって、空へ飛び上がり光って消えた。綱は鬼に手を取り返されて、七日の物忌みを破ったが、仁王経の力で別に被害はなかった。この鬚切は鬼を切って以降、「鬼丸」と改名した。

これは芸北神楽「戻り橋」「羅生門」のあらすじによく似た内容である。ではここで、芸北神楽における「戻り橋」から「大江山」へとつながる物語を整理しておこう。一般的に「戻り橋」で綱が鬼の片腕を切り取り、「羅生門」で鬼がその腕を取り返す。そして「大江山」で鬼退治というわけなのだが、ファンの皆様もよくよくご存知のように、各神楽団でかなり**違いがある**。たとえば、安芸高田市高宮町の原田神楽団の「戻り橋」は、鬼が腕を取り返す「羅生門」のあらすじだったり、安芸太田町の堀神楽団の「羅生門」は、鬼の腕を切り取る「戻り橋」のあらすじであるなど、とてつもなくややこしい。まるで釣り糸が絡まってしまったようだ。ちなみに釣り糸同士が絡まってしまった状態のことを「オマツリ」という。へえ。これこそトリビアである。



これだけややこしいので、今回の「戻り橋」は前編、次回の「羅生門」は後編ということにさせていただく。そして次回はもう一つの「羅生門の鬼」の話を紹介する。がしかし！先にネタばらしをしてしまおう。なんと、この「羅生門の鬼」の話は、「大江山」の酒呑童子を退治した後の物語なのであるっ！次回に続く！

## 第六章 羅生門

さあ、いよいよ謎解きの始まりである。とその前に、**渡辺綱**について調べてみよう。生没については頼光とほぼ同じで、953年～1025年となっている。源敦(みなもとのあつし)の養子で、その敦が頼光の父、満仲の婿だったために、その関係で頼光に仕えるようになった。多田源氏の流れを汲む頼光に対し、綱は箕田(美田/みた)源氏の出身である。ので、もともとは源綱(みなもとのつな)なのだが、**養母**が摂津国渡辺に住んでいたため、これにちなんで「**渡辺**」を名乗るようになったという。



少し難しい説明が入ってしまった。それではお待ちかね「**羅生門の鬼**」の話を紹介する。ここでは、御伽草子「**羅生門**」と謡曲「**羅生門**」を組み合わせ、より物語性を持たせて、神楽ファンのみなさんにわかりやすいよう編集を試みた。



源頼光と四天王、藤原保昌の六人は、大江山で酒呑童子をはじめ七十五匹の鬼を退治した。春雨が降り続くある日、頼光は四天王と保昌を招いて酒をふるまった。

その酒宴の席で保昌が「そいや、大江山で鬼退治したときに、一匹討ち漏らした鬼がおるらしいで。」と語り始めた。みなが興味を示し、保昌は続いて「へえで最近、その鬼が九条の羅生門に住み着いてからに、わりいことするゆうんじやと。」と言った。

すると渡辺綱が「おおい保昌さん、そがあなことがあるわきやなかろうて。羅生門は都の南

門じやろ？『土も木も わが大君の国ならば いくらか鬼の宿と定めん』ゆう歌もあるじやろが。ホンマにおったとしても、羅生門に鬼を住ませちやあいけんわ。そんなつまらんげな事は言いんさんなや。」と言った。保昌は「へじやああんたはわしがウソをようる言うんか。このこたあ、誰でも知つとるけえようるんで。ウソじや言うんなら、今晚にでも羅生門



へ行ってからにホンマかうソか見てきんさいや。」と答えた。すると「はあ、そりやあわしが羅生門へよう行かん思うとんじやろ。へんならホンマかうソか、今晚行ってみちやろうてえ。なんか、そけえ行つたいう印のもんをくれえや。」と、羅生門へ行く姿勢を示した。みな「やめときんさいや。」と止めたが、綱は「いやいや、別に保昌さんとケンカするわけじゃないんだが、一つは帝(みかど)のためでもあるけえ、印をくれえ言うたんよ。」と言う。それを聞いた頼光は「なるほどのう、綱が言うように一つは帝のためにもなるけえ、印を立てに行つてきんさい。」と許可を出した。



こうして綱は、羅生門に置いてくる印をもらい、さっそく準備をし始めた。鎧を身に付け、兜の緒を締め、先祖伝来の太刀を持ち、たくましい馬に乗り、たった一人で宿を出て、二条大宮を南へ進み羅生門へと向かった。さて九条通りに出て羅生門に近づくと、ものすごい雨が降り始めた。突然のすさまじい嵐に、馬はおびえて立ち止まってしまった。綱は馬から飛び降り、羅生門の石段に駆け上がると、印の札を壇上に立て置いて帰ろうとした。しかし、後ろから兜の鍔(しころ：兜の左右や後ろに垂れた、首をおおうもの)をつかんで引き止めるものがあるので、「うお！鬼じゃあ！」と太刀を抜いて斬ろうとした。だが鬼は兜をつかんだので、綱は兜の緒を引きちぎって、思わず壇から飛び降りた。鬼は怒り狂って持っていた綱の兜を投げ捨てた。その背丈は羅生門の軒と同じくらいで、両眼は月日のようにらんらんと光り、綱をにらみつけて立っていた。綱は少しもひるまずに太刀をかまえ、「あんたあ知らんのか！わりいことをするもんは、罰が当たるんでえ〜！」と言って切りかかると、鬼は鉄杖(てつじょう)を振りまわしてきた。綱はそれをかわし、違いざまに鬼に斬りつけた。鬼はさらに突進して綱に組み付こうとしたが、綱はその腕を切り落としたりした。鬼はたまたま塀に上がり、空へと飛び上がった。綱は後を追ったが黒雲におおわれてしまい、「いつか取り返しちやるけえの！！」と鬼の叫ぶ声が聞こえ、そのまま姿を消してしまった。



これが「羅生門の鬼」の伝説である。「戻り橋」で紹介した話とよく似ているのはすぐに気づかれたと思う。が、問題はその時期。これでは「戻り橋」→「大江山」→「羅生門」という順



番になってしまう。ますます混乱してきそうだが、どうやらこの「羅生門」の伝説は、「戻り橋」の話をもとに作られたようである。つまり、「戻り橋」「大江山」の物語が定着して以降に作られたもので、正確に言えば神楽の物語と関連はないことになる。羅生門はこれ以外にも、いろいろ鬼にまつわる伝説が残されており、そういったものが組み合わさってこの「羅生門」の鬼伝説が生まれたようだ。

ちなみに御伽草子「羅生門」は、綱が切り取る腕が**右腕**だったり、鬼を切る刀も**膝丸**のほうだったりなど、一般的な物語と多少違う部分がある。これは御伽草子が人から人への語り伝えをまとめたものであり、またいろんな人が書き残しているのも、どうしても微妙に違いが出てしまうのである。さらに御伽草子「羅生門」は、このあとに頼光が病になり、綱が牛鬼の腕を切り取り、頼光が物忌みをし、腕を取り返されたりという、どこかで聞いたような物語が続いている。これも、もとは**土蜘蛛伝説**であるものが、いろいろ尾ひれがついて御伽草子に収められたということである。残念ながらその続きの物語はスペースの都合上、割愛させていただく。



で結局、綱が鬼の腕を切り落としたのはどっち？という最大の問題が残っているが、ハッキリ言ってこれは「**各神楽団によって異なる**」としか言いようがない。もとになった伝説がこれだけバラバラであるのだから、各神楽団で**解釈が違って**くるのも当然である。ただ、一つ確かなことは、「**都は羅生門、戻り橋あたりにおいて、茨木童子が左の腕を切り取られたり。**」というセリフ、これは正しくないということである。前回で解説したとおり、戻り橋と羅生門はまったく別の離れた場所にある。例えるなら「今日は神楽があっただけえ、神楽ドーム、開発センターあたりに行ってきたんじゃ。」てな感じか。「どっちやねん！」とツッコミを入れなければならない。今度「戻り橋」「羅生門」を見るときは、そういうセリフをよく聞いて、いったいどちらで鬼の腕が切り取られたのか、注目すると面白いかもしれない。

最後に「羅生門」そのものについてだが、正確には「**羅城門**」と書いて「**らしょうもん**」と読む。しかし、もともとは「**らいせいもん**」や「**らせいもん**」と呼ばれていた。それが「**らしょうもん**」と呼ばれるようになったのはずっと後のことで、完全に定着した原因はあの芥川龍之介の小説「**羅生門**」であるといわれている。ちなみにこの小説「羅生門」、それから黒澤明監督の映画「**羅生門**」は、神楽の物語とは関係ない。

いつしか羅生門には鬼が住むと言われるようになった。「**門**」はある一つの世界と別の世界を結ぶものであり、そこを通り抜けるということは別世界への旅立ちということの意味する。羅生門の鬼伝説も、そういった意識のもとで生まれたのだろう。謎だらけでお送りしたこの章、このあたりでお開きとさせていただきますが、最後はやはり謎でしめることにしよう。

『「戻り橋」や「羅生門」で渡辺綱に腕を切り取られた鬼は、**本当に茨木童子だったのか!?**』

## 第七章 大江山 前編

ようやく大江山の麓(ふもと)まで来た。だが、千丈ヶ岳(せんじょうがたけ)まではまだまだ遠い……。この大江山については、語らなければならないことが山ほどあり、とてもじゃないが一つの章だけでは無理なので、前・中・後編と三章に渡ってお送りすることにする。

まずは大江山の場所について。実は大江山は二つある。これまた知らない方にとっては混乱を招きそうだが、わかりやすく地図を描いてみたので参考にさせていただきたい。

神楽でおなじみの「丹波の国大江山」は、都から北西の位置にあり、かなり離れている。が、中世の「大江山」と言えば、すぐ近くの「大枝山」を指していた。ここには酒吞童子の首塚が残されている。また、日本武尊が鬼神を退治する舞台などの伊吹山が酒吞童子退治の場所とする伝説もあったりする。



そのあたりも詳しくみていきたいのだが、そうすると「源頼光」から離れてしまい、またその事だけで二章はスペースをとらないといけない。ということで「大江山」の舞台については、一般説である「丹波の国大江山」とし、今回は他にも「大枝山」がありますよ、という紹介のみにさせていただきます。

では、神楽「大江山」のもとになったと言われる謡曲「大江山」を少しだけ紹介する。謡曲



(ようきょく)というのは、簡単に言えば能のセリフが書かれているもので、神楽と関係しているものは他に「紅葉狩」「土蜘蛛」「安達ヶ原」「鉄輪」などがある。今までは広島弁でわかりやすく紹介してきたが、謡曲を広島弁にしまうと謡曲ではなくなってしまうので、少し難しいがそのまま掲載する。

ワキ(頼光)ワキヅレ(従者) 秋風の音にたぐへて西川や、雲も行くなり大江山。

ワキ 抑々これは源頼光とはわが事なり。さてもこの度 丹波の国大江山の鬼神のこと。占方の詞に任せつつ、頼光、保昌に仰せつけらる。

ワキヅレ 頼光、保昌申すやう、たとひ大勢ありとても、人倫ならぬ化生の者、いづくを境に攻むべきぞ。

ワキ 思ふ子細の候とて、山伏の姿に出立ちて。

ワキヅレ 兜にかはる兜巾を着。

ワキ 鎧にあらぬ篠懸や。

ワキヅレ 兵具に対する笈を負ひ。

ワキ 其のぬしぬしは頼光、保昌。

ワキヅレ 貞光・季武・綱・公時、又名を得たる独武者かれこれ以上五十余人。

ワキ まだ夜のうちに有明の。

ワキ、ワキヅレ 月の都を立ちいでて、行く末問えば西川や、波風立てて白木綿の御抜も頼もしや。鬼神なりと大君の恵に洩るる方あらじ、ただ分け行けや足引の大江山に着きにけり、大江山に着きにけり。

ワキ 急ぎ候程に丹波の国大江山に着きて候。あら不思議や、これなる川にけしからず血の流れそうろう。いかに誰かある、この所にて童子の住処を尋ねて宿を取り候へ。

狂言(剛力) 畏まって候、まず急いで参ろう。(中略)これはこれは女房衆そなたは何として此処にいるぞ。

(女) そのことをござる、わらわは三歳以前に酒呑童子に捕はれて毎日毎日このやうな濯ぎをしていることをござる。

(剛力) 子細を聞けば尤もをござる。某がこれへ来たはこの度頼み奉る頼光公、童子を退治あるべきとの事ぢや程に、そなたも都へ同道せうによって、何卒そなたは肝を煎つてお宿を申してくれぬか。

(女) 何がさて都へ連れて行て下さるならば、お宿のことはわらわが合点をござる。童子へ其由申ませう程にまづそれに待たせられい。

(剛力) 心得ておりやる。

(女) いかに童子の御座あるか。

シテ(酒呑童子) 童子と呼ぶはいかなる者ぞ。

狂言(女) 山伏達の御入り候が、一夜のお宿と仰せられ候。

シテ 何と山伏の一夜のお宿と候や、怨めしや桓武天皇に御請け申し、われ比叡の山を出でしより、出家には手を指さじと固く誓約申せしなり。中門の脇の廊に留め申し候らへ。

狂言(女) 心得申して候。



シテ いかにか客僧たち、何処より何方へ御通り候へば、此の隠れ家へは御出でて候ぞ。

ワキ さん候、これは筑紫彦山の客僧にて候が、麓の山陰道より道に踏み迷ひ、前後を忘れじ佇み候所に、今宵のお宿何より以て祝着申候。さて御名を酒呑童子と申し候は、何と申したる請にて候ぞ。

シテ 我が名を酒呑童子と云ふことは、明暮酒を好きたるにより、眷属どもに酒呑童子と呼ばれ候。されば此を見、彼を聞くにつけても、酒ほど面白きものはなく候。客僧達も聞きめされ候へ。

(中略)

ワキ 又は神国氏社南無や八幡山王権現、われらに力を添へ給へと、頼光・保昌・綱・公時・貞光・季武独武者、心を一つにしてまどろみ臥したる鬼の上に、剣を飛ばす光の影、稲妻振動おびただし。

シテ 情けなしとよ客僧達、偽あらじと云ひつるに鬼神に横道無きものを。

(中略)

ワキ あら空事やなどさらば、王地に住んで人を取り、世の妨げとはなりけるぞ、われらをば音にも聞きつらん、保昌が館に独武者、鬼神なりとも遁すまじ、ましてやこれは勅なれば、土も木も我が大君の国なれば、いつくか鬼の宿りなるらん。

(中略)

ワキ 頼光保昌もとよりも、(地)頼光保昌もとよりも、鬼神なりともさすが頼光が手なみに、いかで漏らすべきと、走りかかつてはったと打つ手に、むんずと組んでえいやえいやと組むとぞ見えしが、頼光下に組み伏せられて鬼一口に喰はんとするを頼光下より刀を抜いて二刀三刀刺し通し刺し通し、刀を力にえいやとかへし、さも勢へる鬼神を、おしつけ怒れる首を打ち落とし、大江の山をまた踏み分けて、都へとてこそ帰りけれ。



読みづらい箇所、難しい漢字がふんだんで、「これ読めません。」てな苦情のコメントもつきそうだが、たまにはそのままを掲載し、昔の物語の雰囲気味わうのもよいのではないだろうか。そして多くの神楽ファンの方が、最初の一行を読んだ時点でピンとくるものがあると思う。そう、安芸太田町の三谷神楽団「大江山」は、この謡曲をかなり忠実にして舞っておられるようだ。他の旧舞「大江山」も、多くは謡曲を出典としているようだが、かなり違いがあるように思える。これは、前章で紹介した「戻り橋」「羅生門」の物語以上に、「大江山」伝説が数多く残されているためだと考えられる。では次回は、またいつものバージョンで「大江山の酒呑童子退治」をご紹介したいと思う。

## 第七章 大江山 中編

まずはじめに、藤原保昌(ふじわらのやすまさ)について調べてみよう。生没年は 958～1036 年で、弟の保輔(やすすけ)はなんと名高い盗賊だった。摂津の国の平井という地に住んだので、平井氏と名乗った。頼光と同じく、武勇に優れた人物として広く知られていたようだ。四天王は頼光の部下だが、保昌は頼光と同じ位まで出世した人物なので、部下ではなく同僚のような感じとイメージしたほうが良いだろう。

それでは、「大江山の酒呑童子退治」の物語を「御伽草子」より紹介する。そのままを訳したものを掲載すると、とてつもなく長くなるので、そのあたりは読みやすいように編集したのでご了承いただきたい。

昔、丹波の国大江山に鬼神が住み、日が暮れると大勢の人をさらっていた。都においては、17～18歳の若い女を中心にして、数多くの者がさらわれていた。中でも大富豪である池田中納言くにたかの娘が行方不明になったときには、朝廷内でも大騒ぎになった。中納言はあまりの悲しさに、村岡のまさときという、名高い陰陽師に占ってもらうことにした。陰陽師を前にして泣きながら「わしのたった一人の娘が、ゆうべどこ行ったんかわからんようになったんよ。今年でまだ十三歳なのに…。もしどけえおるか占ってくれりゃあ、なんぼでも銭(ぜに)あげるけえ、なんとかしてくだしゃあ。」と言った。もちろん陰陽師は名人なので、さっそく巻物を取り出し、姫の所在を占った。そして「あんたの娘さんをさらったんは、丹波の国の大江山におる、鬼の仕業じゃあ。今のところ命に別状はなあみたいじゃの。」などと、まるで見てきたかのように占った。中納言はこれを聞いて、急ぎ朝廷へ報告した。



これを受けて内裏(だいら)では、帝をはじめ公卿、大臣が集まって、話し合いとなった。その中で関白が進み出て「前にもこれとおんなじような事件があったらしいんじやが、そのときや弘法大師さんに頼んで、わりいやつを封じ込めてもろうたんだげな。ほじゃけ、このたびやあ、源頼光を呼んで鬼退治せえと言うてみようや。そうすりや定光・末武・綱・公時・保昌らが加わるじゃろうて。こいつらあはぶちつええけえ、鬼も恐れてよう手を出さんいうらしええの。あがあしょうやあ。」と提案した。さっそくそれで意見がまとまり、帝は源頼光を呼び寄せた。頼光は突然の帝の招集に、何事かと急ぎ内裏(だいら)へと参上した。すると帝は、「いかに頼光、よう聞きんさい。丹波の国大江山に鬼が住んで、わりいことをするんじや。この国はわしのもんじやけえ、どこにも鬼が住むとこはないはずで。それも都からこげな近くにおってから、人を悩ますじやことの、ほんまに。しばいちゃりんさい。」と勅命を出した。

頼光はこの仰せ(おおせ)に、大役を任された喜びもさることながら、鬼神は変化自在の者であるので、退治しようと近づけば塵(ちり)や木の葉へと姿を変えてしまい、人の目で見つけることは難しくなる。がしかし、勅命に背く事はできない。などあれこれ考え、急ぎ館に帰った。そして四天王たちを集め、

「わしらあだけじゃ、とてもじゃないが勝てんわ。神様仏様にお祈りゆうしてからに、神さんの力を頼もうや。そうするんが一番えかろう。」と言った。そして頼光と保昌は八幡へ、綱と公時は住吉へ、定光と末武は熊野へ、それぞれ参拝した。そして一同は再び館へ集まり、作戦を練った。頼光が「こりやあ、人が多けりやええいうもんじやないよの。わしら六人が山伏に変装して



から、道に迷うたふりゆうして、丹波の鬼ヶ城(おにがじょう)へ行つて、うまいしこ鬼をだましちやりやあ、退治するなあみやすかろうて。みなそれぞれ笈(おい)をこしらえて、兜やら武器やら入れて持つてこうやあ。どがなや？」と言うと、「あがしよ！」と、みな笈を作り始めた。それぞれその中に鎧や兜、刀などを仕込み、酒を持ち、小刀、頭巾(ずきん)、鈴懸(すずかけ)、ほら貝、金剛杖を身につけ、丹波の国へと向かった。この六人の様子は、いかなる悪鬼でさえも恐れるように思えた。

ここで少し休憩。「池田中納言くにたか」や「村岡のまさとき」など原文で漢字を使われていないものがあるのだが、下手にこちらで漢字を使わず、あえてひらがなで記載させていただく事にした。また伝説によっては、陰陽師はあの**安部晴明**が登場するが、この御伽草子では晴明は出てこない。他にも名だたる陰陽師がいて、その話も興味深いが、ここでは省略する。

急げば程もなく、六人は丹波の国大江山のふもとに着いた。すると里人がいたので、頼光が「ちいと聞いてみるんじやが、こころで千丈ヶ岳言うたらどこですかいの？鬼の岩屋に行きたいんじやが。」と尋ねた。里人は「この峰(みね)をず〜っと奥へはあてっての、もひとつ谷と峰を越えりやあ、**鬼の住処(すみか)**じゃ言うて、人間はそこから先やあ行けれんのんよ。」と語った。頼光たちはこれを聞いて、山奥へと入っていき、谷を越えて峰を越えて登っていくと、大きな岩穴を見つけた。



その中に小屋があり、**翁(おきな)**が三人いた。頼光は少し警戒し、「あんたらあは、なしでこがあなとけえおるんかいの？」と聞くと、「わしらあは決していなげなもんじやなあで。この山の酒呑童子に嫁さんや子供をとられてから、どがあぞしちやろう思うてここまで来たんじやわ。あんたらあよう見りやあ、普通の人じやなあおう。たあてえ、酒呑童子を退治せえ言うて勅命を受けた人じやろうて。ほいじやあ、わしらがこっから道案内しましよいうてえ。まあその前にちいと休みんさい。」と言った。



頼光たちは気を許し、笈を下ろして休むことにした。都から持ってきた酒を三人の翁にすめると、翁が言うに「おお、この山の鬼神いうなあ、ぶち酒が好きなんよ。へじゃけ酒呑童子いうて呼ばれるんじゃ。わしらはおかしげな酒を持とって、**神便鬼毒酒**(じんべんきどくしゅ)いうんよ。こりゃ鬼が飲みゃあ力が出せんようになるんじゃが、あんたらが飲めばかえって薬になるんよ。」そして**星兜**(ほしかぶと)を取り出し「あんたはこれをかぶって、鬼の首を切りんさい。」と頼光に渡した。六人はこれを見て、さては**三社の使**いか、なんとありがたい…とっていると、翁たちが立ち上がり「おしや、行こうでえ。」と**道案内**を始めた。それに従ってさらに山奥へ入り、暗い岩穴をいくつもくぐり抜けると、細い川にたどり着いた。翁が「この川をず〜っと上って行きんさい。そしたら若い娘さんがおってじゃけえ、あとはその人に詳しゅう聞きんさいや。鬼をやっちゃるその時は、わしらも手伝うけえ。**住吉、八幡、熊野**の神がここらまできたでえ〜。」と言ってかき消すように消えてしまった。



六人は翁たちがいたところを深く拝み、教えに従って川を上っていくと、言葉どおり**若い娘**に出会った。頼光が「あんたあ誰かいの?」と聞くと、「わたしあ**都の者**なんじゃけど、ある夜に鬼につかまって、こげなとこまでさらわれたんじゃ。ここらは**鬼の岩屋**じゃ言うて、人間が来れるわきやあなあ。あんたらどがんでこけえ来たんかいの?どがあぞしてわたしゅう都まで帰しちゃんさい。」とさめざめと泣きながら答えた。そこで頼光が「あんたあどこの子かいの?」と聞くと、「わたしあ**花園中納言**の一人娘なんよ。他にも若いんが十何人さらわれとる。**堀河中納言**の娘さんが、今朝血うしぼられてからに、それで**血染めの服**を洗ようるんじゃ。」とまたさめざめと泣いた。頼光は「わしらは鬼ゆう退治してからに、あんたらを都に帰しちゃう思うてここまで来たんよ。鬼の住処をようよう教えちゃんさい。」と言うと姫は大喜びで「この川をず〜っと上っていきやあ、**鉄の門**があつて鬼が番をしよるわ。へえで中にはあたら、ごうぎな御殿が建つとるけえ。姫さんがおる牢屋の前には、ほしくま童子、くま童子、とらくま童子、かね童子いう、**鬼の四天王**がおって番をしよるんじゃ。こいつらぶちつえらしいで。へえで酒呑童子いうなあ、色があこうて背がたこうて、昼は人の姿なんじゃが、夜になったらぶちいびせえ鬼になるんよ。こいつあぶち酒が好きで、酔うて寝たらなんも覚えとらんらしいで。へじゃけあんたら、童子をだましてから酒を飲ませて、酔うて寝たところをやっちゃりんさい。あんたらならできようて。」と言った。

非常に興味深い物語だが、中でも注目したいのは、三人の翁、姫との**出会い**によって、ようやく鬼の住処へとたどり着くという事。これはつまり、文中にあるように、**人間の力では鬼の世界に入ることすらできない**、という意味である。この部分も詳しく見ていきたいのだが、そうするとかなり難しい話にもなるので、省略する。神楽団の中では翁(三社の使い)や姫に逢わずに、すんなりと岩屋にたどり着くようにしておられるところもある。上演時間の都合上、やむなく省略されたのだと思うが、この「**人の世界と鬼の世界は別の次元**」という概念は、神楽においても**非常に重要な**ものであると考えられる。ファンの方にもぜひ注目して見ていただきたい。とうことで「大江山」の前半部分を紹介した。続きはまた来週！

## 第七章 大江山 後編

源頼光をはじめとする六人は、花園中納言の姫の教えどおり、川を上っていくと、大きな鉄の門にたどり着いた。鬼の門番たちが六人を見て「おお！？こりゃ珍しい。最近は何を食うとらんけえ食いたいのう思よったところじゃ。飛んで火に入る夏の虫たあこのことじゃの。よし、食お。」と頼光たちに飛び掛ってきた。が、その中の一匹の鬼が「こりゃ、あわてんさんな。こがぁに珍しいご馳走を、わしらあだけで食うたらいけまあ。先に大将に言わんにやあ。」と言った。鬼たちはそれはもつともだと、奥へ入って酒呑童子へこの事を伝えた。すると童子は「そりゃ珍しいわ。誰が来たんかいのうや。奥へ通しんさい。」と言うので、頼光たちは縁の上に通された。



しばらくすると生臭い風が吹き、雷鳴稲妻がとどろき、人間の姿をした酒呑童子が現れた。童子は「こかあごうぎな山なんで。あんたら人間じゃろうが。天を掛けてきたんかいの。聞いちゃるけえ語りんさい。」と言った。頼光は「わしらは山伏の修行をしよるんじやが、道に迷うてからここまで来てしもうたんよ。これも何かの縁じゃけえ、今晚泊めてつかあさいや。わしら酒を持ってきとるけえご馳走しますで。」と答えた。童子はこれを聞いて頼光たちを部屋の中まで招きいれ、「へじゃあまず、うちかたの酒を飲んでみんさいや。」と言い、手下の鬼に酒を持ってこさせた。



見ると、たった今搾ったとみられる人間の生き血であり、童子はそれを頼光に差し出した。頼光は盃(さかずき)を受け取ると、何でもないようにさらりと飲み干した。続いて綱もさらりと飲み干した。童子は「酒のつまみがありませんか?」と言い、手下の鬼が持ってきたものは、これも今切ったとみられる人間の腕と足であり、それがまな板の上に乗っていた。頼光はこれを見て、腰につけていた小刀をすりと抜き、肉を一口大に切り取ってうまそうに食べた。これを見た綱も「まあつまみまでもろうて、ありがたいことじゃのう。いただきます。」と同じく切り取ってうまそうに食べた。

童子はこれを見て「あんたらあは同じ人間の肉を食うんかいの。いなげなやっちゃのう。」と怪しんだので、すかさず頼光は「そがぁに思うてのは、ようわかりますで。わしらあ山伏の教えは、人様からいただいたものは、嫌と言わずにありがたくいただくいうもんじゃけえ。へじゃけえ何ゆうもろうても嬉しゅう思いますてえね。」と言って童子に礼をした。すると童子はあわてて頼光に礼を返し、「ありやあ、ホンマは食いとうないもんを、食べんさい言うて出したんは、ホンマにわりかったのうや。」と反省した。その時、頼光は例の酒を取り出し、「こりやあ都から持ってきた酒なんじゃが、童子さんにも差し上げますわあ。」と、まずは自分で毒見をし、童子にすすめた。童子は盃を受け取り、さらりと飲み干した。その味は甘露(かんろ)のようで、言葉では例えようもないものだった。童子は上機嫌になり「うちかたのべっぴんさんにも飲ませてあげようてえ。」と池田中納言と花園中納言の娘を呼び出した。



そして童子はあまりの嬉しさに、自分の身の上話を始めた。

「わしゃあの、越後の生まれで山寺育ちなんよ。じゃが坊さんとケンカしての、いっぴやあ坊さんを殺したんじゃ。へえで比叡(ひえい)の山あ行って、こけえ住もう思うたら、伝教(でんきょう)いう坊さんが来てわしを追い出しやがった。やれんけえこの山へ来たんじゃが、こんだあ弘法大師いうパ〜プ〜に追い出された。へじゃけいっぺん高野山に行ったんじゃが、今はもう邪魔なんがおらんけえ、こけえ住み着いてからにぜいたくしよるんよ。都からべっぴんさんをさろうたりのう、こげなごうぎな御殿を建てたりのを、ホンマ他にこがなあぜいたくしよるやつあおらんで。ただのを、一つやれんのは、都で有名な頼光いうぶちわりいやつがおるんじゃわ。こいつは日本一つええんじゃ。ほいから頼光の部下に、定光・末武・公時・綱・保昌いうんがおって、こいつらもつええんじゃ。この六人だきやあの、ホンマ油断ならんで。どがあなか言うたら、こなあだの春ん時に、わしの部下の茨木童子いうんを、都へ行ってこさあた時に、あの綱と出おうたんじゃわ。茨木童子が女に化けてからに、よ〜にだまして、ひつつかまえたところを、綱のやつが片腕を切り落としやがった。ほじゃけわしや〜ようよう考えてから、腕を取り返して、今はもうせやないんで。あいつらがむかつくけえ、わしや最近都へよう行かんのんよ。」

そう語ると、酒呑童子は頼光をじい〜つとにらんで、「あんたらあはいなげなのう。よう見りや、あんたは頼光じゃないかあ!?!その隣やあ、茨木童子の腕を切りやがった綱じゃろうて。残る四人は定光・末武・公時・保昌じゃろうが、げにあがあで。おい、手下の野郎ども、油断すなよ!しばいちゃろうでえ〜!」と叫び、立ち上がった。頼光はこれを見て、ここで見抜かれては大変と思い、少しも慌てず騒がず、からからと笑い飛ばした。「まあ〜、うれしい事を言いんさるのう。日本一つええやつに、山伏が似とりんさるか。その頼光いうぶにも、末武とかいうぶんも、いま初めて聞いたあや。げに、そがんわりいやつなら、はようわしらを食うちゃんさい。わしらは今童子さんに酒をもろうたりして情けをかけてもろうた。一つも命が惜しいとは思わんけ、どうぞどうぞ。」と顔色一つ変えずに言っただけのけた。

童子はすぐさま気を取り直し、「まあそげなことを言うてか。よう考えたら、あいつらあがここまではよう来んじゃろうの。酒に酔うてしもうたけえ、つつい…。いやあ、ホンマに酔うたわ。赤うなつとるんは酒のせいじゃけ、鬼じゃなあんで。」と言ってすっかり気を許した。そして周りの鬼たちにも酒を飲ませ、ついに鬼たちはみな酔いつぶれてしまった。童子は「おし、寝ようてえ。山伏さん、また明日。」と寝床へ入って行った。



頼光はこれを見て、残された姫に近づき「わしらは鬼退治してあんたらを都に帰すために来たんじゃ。酒呑童子の寝床を教えてつかあさい。」と言うと、姫は「まあ～嬉しいのう！へじゃ案内しますけえ、したくしんさい。」と答えた。六人は笈に入れてきた鎧兜などを素早く身に付け、討ち入りの準備を整えた。そして姫のあとに続き、童子の寝床へと急いだ。しかし童子の寝床は、巨大な鉄の扉で閉ざされており、とても入ることはできない。すきまから中をのぞくと、先ほどとはうってかわり、恐ろしい鬼の姿となった酒呑童子が寝ていた。身長は7mくらい、髪は赤く逆立ち、角が生え、手足は熊のようで、その姿は身の毛もよだつほどだった。そこへ、三社の神が現れ、六人に「ようここまで来ちゃんさったのう。鬼の手足はわしらが鎖で縛っちゃったけ、よう動かんで。頼光は首を切りんさい。他のもんは胴体を切りまくりんさい。いたしゅうないで。」と言って、鉄の扉を開いて消え失せた。頼光たちは神の加護に感謝しつつ、童子の寝床へと忍び込んだ。そして頼光は頭のほうに行き、刀をすりと抜いて「なまんだぶう三社の神さん、力を貸しちゃんさい～」と三度礼をして、童子の首を一気に切り落とした。酒呑童子は目を覚まし、「何ゆうするんなら～！ウソじゃあなあよったくせに、あんたらひきょうじゃのお！」と起き上がろうとしたが、手足は鎖で柱に繋がれているので、起きることができない。童子は怒り狂って大声で叫べば、その凄まじさは雷電稲妻、天地を揺るがすほどだった。他の五人は胴体を切り刻めば、首は高く舞い上がり、頼光めがけてただ一咬みと襲い掛かったが、三社の神の星兜のおかげで、頼光は傷一つ負う事はなかった。



ついに酒呑童子は息絶え、六人は大庭へと出た。すると大勢の鬼がおり、その中で茨木童子が「大将をやりやがってからあ～！」と襲い掛かってきた。綱がこれを見て「あんたあどれほどのもんかよう知つとるで。今度こそ退治しちやる！」と応戦した。しばらく互角に戦っていたが、ついに茨木童子が綱を押さえこんだ。頼光がこれを見て走りより、茨木童子の首をぱっさりと切り落とした。そして六人は残った鬼たちをすべて討ち取った。



頼光は「よしや、こんだあ姫さんを助けようで。」と捕らわれていた姫たちを連れ出し、都へ帰ろうとした。その時、辺りを見ると鬼たちに食われてしまった人間の骨が山となっていた。そしてその中に、手足を切り落とされた若い姫が、息も絶え絶えになっているのを見つけた。頼光が駆け寄るとそれが**堀河中納言の娘**で、「なんとまあお姫さん、わしらは今鬼ゆうみな退治して、都へ帰るとこなんじゃ。あんたも連れて帰っちゃるけえ、もちいとがんばりんさいよ。」と頼光が言うと姫は「そりゃあ嬉しいことを言うてじゃの。へじゃがもうわたしあダメじゃけえ、形見に髪の毛を切って、両親に渡してつかあさい。ちいでに帰る前に、わたしにとどめをさしてつかあさい。」と言った。頼光は「そりゃあそうかもしれないが、へじゃ都へ帰ったら、すぐにも迎えをよこすけえ、もちいと待ちよりんさい。」と言い残し、一行は大江山を下った。ふもとの村で馬を調達し、姫たちを先に帰らせると、都では大騒ぎとなり、凱旋する頼光たちを迎えようと**大勢の人が集まった**。その中に池田中納言夫婦の姿もあり、ついに娘との再会を果たした。頼光は帝に鬼退治を報告すると、その**褒美は限り無し**だったと言う。これ以来、この国は平和が訪れ、いつまでも**平安な世**が続いたという。



大変長くなって申し訳ない。

これでもかなり削ったのだが、注目すべき点はいくらでもあるが、中でも酒吞童子が、昼は人間の姿で、夜になると**恐ろしい鬼の正体**を現すという事。「童子」と言う名だけに、これは重要な点だと思うのだが、実際の神楽においてそういった演出をされているところは意外と少ない。安佐町の宮乃木神楽団が、**立ち合いの寸前に面を変える**という事をされているが、非常に**見事な演出**で個人的にも好きな場面である。ついでにもう一つ言わせてもらおうと、あの中川戸神楽団に、「**スーパー神楽**」として「**大江山**」を創作していただきたいと日頃から思っているのだが、中川戸さん、ファンのみなさん、いかがだろうか。

この物語は、**頼光たちの武勇**をメインにしつつ、**神のご加護**があつてこそ、という印象も強調されている。この点は、この「大江山」に限ったことではなく、先に紹介した「葛城山」など、この時代に流行った物語に**共通**することである。この、「時代に流行った」もしくは「誰かが流行らせた」という観点から考えれば、このシリーズ最大のテーマである「なぜ、貴族風の生活をしていたはずの源頼光が、伝説の主役に仕立て上げられたのか」という事への一つの答えが見つかると思われる。さあ、では次回はついに最終章。その謎に迫ろう。

## 第十章 英雄化された頼光

いよいよシリーズ最終章、まとめの章である。が、まとめの章ということになれば、難しい話ばかりになりそうなので、やっぱりまとめない。まとめないかわりに、晩年の頼光についての物語が「今昔物語集」に収められているので紹介する。

今は昔、東宮(後の三条天皇)がお出かけになった時に、東三条殿という大きな屋敷の軒下に、狐が寝ているのを見つけた。そこで東宮は、お供をしていた源頼光に「おい頼光、あつけえ狐がおろうが。あれに矢を討ってみいの。」と命令した。すると頼光は「そぎゃんこたあちいと無理じゃ思うんですが。他の人なら外してもせやなあが、わしが外したとなりや、大事(おおごと)ですけえ。」と辞退した。しかし東宮に「まあええけえ、マジでやれえやあ！」と言われ、頼光は辞退できなくなり、弓をとって矢をつがえながらも「この弓がもちいと強けりやええんじやが、こんぎやあに離れた的には、この矢は重たあでえ〜。矢が途中で落ちてしもうたら、外すより耐えがたあけえやれんよお！どがしょうかいねえ〜。」などとブツブツ言いながら、矢を放った。すると、見事狐の胸に命中し、狐はそばの池に落ちて死んでしまった。東宮をはじめ、そばにいた人たちは「すげえ！」などと頼光を褒め称えた。東宮は褒美として頼光に馬を与えようとした。しかし頼光は「ありやあ、わしが討った矢じゃあなあんよ。いつも拝みよる石清水八幡さんが、助けてくれちゃったんですよ。」と言って引き下がった。それ以降も頼光は、家族や知人などに「ありやあ神様仏様のおかげなんで。」と常に語っていたので、世間は頼光を褒め称えたという。



ここに登場する東宮は、今で言えば皇太子のような存在で、藤原道長と親しくしていたとはいえ、武家の出身である頼光がそのお供をしていたという事であるから、どれほど頼光がまわりから大物と見られていたか、想像できるような物語である。さらに鬼退治などではないにせよ、頼光の武勇と八幡崇拝がテーマとして書かれている。

冒頭で「まとめない。」と爆弾発言したが、まとめないと終わりそうにないので、やっぱりまとめる。なんじゃそりゃ。とにかく、「英雄化された頼光」についての謎を解くには、次の三つの大きなポイントがあげられる。

まず一つ目。平安後期に**賊征伐の事件**が多発したこと。実はあの大江山にも、なんらかの反中央勢力がはびこり、それを朝廷の命を受けた軍が制圧したという**記録**が残されているのだ。つまり、鬼退治ではないにしろ、大江山へ賊を征伐するために武将たちが攻め上ったのは事実なのである。「葛城山」の章でも述べたように、こういった事件が「酒吞童子」のベースになった、という説もある。



そして二つ目。**鬼退治の伝説を作る必要**があったということ。いつの世でもそうだが、権力者にとっては下の者が逆らうことほどやっかいなことはない。上記にあげたように、賊退治の多発が**政治不信**につながり、民の**朝廷への不満**が高まる一方となる。そういった不信感を、鬼退治などの伝説を広めてごまかした、という仮説である。現代でさえ、お偉いさん連中は権力と大金を操り、自分の不正や不祥事を隠そうとするのである。ケータイやテレビがなかった時代、鬼や神様仏様が信じられていた時代。**鬼退治**という物語は、誰でも興味を持つ、恰好(かっこう)の題材ではなかろうか。

そして最大のポイントは、英雄として**最もふさわしい人物**が源頼光であった、ということ。頼光は藤原道長に仕えていたという大きなアドバンテージがある。たとえ頼光の名は知らなくても、「あの道長様に仕えとったんじゃと。」と聞けば「はあ、そりゃよっぽど強い人だったんじゃろて。」と思われていたということは、想像に難くない。また、鬼退治の物語が作られ始めた(仮説)平安後期から、「御伽草子」によって酒吞童子の話が定着した**室町時代**という時代背景を考えると、要するに**貴族から武士**へと変わっていった時代だった。**清和天皇の血筋**で、「源」氏を名乗る頼光はまさに時代にピッタリの主役だったのである。もし、源氏が平氏に敗れていたら、「源頼光」という名は今日まで残っていなかったかもしれない。ヘタすりゃ、「酒吞童子」の物語の**主役は藤原保昌**とかになってたりして…！伝説は、ちょっとしたことですぐにその形を変えてしまうものである。「源頼光」が主役であり続け、世に定着することができたのは、こういった**時代背景**に支えられた面が大きいのではないだろうか。





こうして、英雄になるべくして、頼光は**伝説の英雄**になった。藤原道長に仕え、必死に源氏の地位を高めようとした源頼光。確かにその後、**源氏は繁栄**し、幕府を開いたりするなどの活躍もあった。がしかし「源頼光」という名が、それから1000年近くたった現在、神楽という芸能の中で**大ブレイク**してしているということは、予想だにできなかったことであろう。

この現状を見て、きっと頼光殿も苦笑いしているに違いない。というわけで、十章にわたってお送りしたシリーズ「源頼光」、これにて完結。長い間ご愛読してくださった皆さんに、心から感謝したい。ではまたの機会に。

## 参考文献

- 臈谷 寿 「源 頼光」 吉川弘文館  
東京大学史料編纂所 「大日本古記録 御堂関白記」 岩波書店  
東京大学史料編纂所 「大日本古記録 小右記」 岩波書店  
馬淵 和夫・国東 文麿・今野 達 「日本古典文学全集 今昔物語集」 小学館  
大島 建彦 「日本古典文学全集 御伽草子集」 小学館  
西尾 光一・小林保治 「新潮日本古典集成 古今著聞集」 新潮社  
黒板 勝美・国史大系編修会 「尊卑文脈」 吉川弘文館  
小松 和彦 「酒呑童子の首」 せりか書房  
石川 透 「御伽草子 その世界」 勉誠出版  
笹間 良彦 「鬼ともものけの文化史」 遊子館  
佐竹 昭広 「酒呑童子異聞」 平凡社  
志村 有広 「羅城門の怪」 角川書店  
大江山鬼伝説一千年祭実行委員会鬼文化部会 「大江山鬼伝説考」  
高橋 昌明 「酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化」 中央公論新社  
山田 現阿 「絵巻 酒呑童子」 考古堂  
竹本 幹夫 「対訳でたのしむ 土蜘蛛」 檜書店  
佐々木 順三 「かぐら台本集 新曲目の部」



## 写真協力

都治神楽社中  
大塚神楽団  
原田神楽団  
三谷神楽団  
八重西神楽団  
中川戸神楽団  
広森神楽団  
あさひが丘神楽団  
本地中組神楽団  
安野神楽団  
綾西神楽団  
宮乃木神楽団  
山王神楽団  
堀神楽団  
筏津神楽団  
琴庄神楽団  
龍南神楽団  
東山神楽団  
大森神楽団  
小枝神楽団  
川北神楽団  
上河内神楽団



## イラスト

門出尚子

## 著者

門出佳大(NPO 法人 広島神楽芸術研究所 研究員)

神楽研究コラム  
シリーズ「源頼光」  
2007年8月17日

NPO法人広島神楽芸術研究所 <http://www.npo-hiroshima.jp>

〒731-1521 広島県山県郡北広島町丁保余原1501-1

(〒731-1515広島県山県郡北広島町壬生149)

TEL(0826)72-5307 Fax(0826)72-4401 mail [office@npo-hiroshima.jp](mailto:office@npo-hiroshima.jp)

NPO法人広島神楽芸術研究所（広島分室）

〒731-3166 広島市安佐南区大塚東1-1-1広島修道大学大学院社会学日隈研究室

TEL(082)830-1136 FAX(082)848-6633 mail [higuma@shudo-u.ac.jp](mailto:higuma@shudo-u.ac.jp)

著者:文責 門出佳大(NPO 法人 広島神楽芸術研究所 研究員)